胸を打つ大平哲学

園田清充

私が「大平正芳」という政治家の名をはじめて耳にしたのは、確か先生が二回目に当選された頃でした。

讃岐の琴平さん詣りをした時、私の乗った駕籠屋さんが雑談のなかで「大平という若手の代議士を出しているが、演説が余りうまくなくてなあ。人間としては天下一品だが、エー、わしらも選挙の時は苦労しますよ」と話してくれました。私が小学校二、三年の頃、田舎政治家の父が「永井柳太郎」「中野正剛」大演説会の感想として、「なかなかの盛況で立派な演説会だった。どちらもそのまま文章になるうまい演説だった。しかし余りにも上手すぎる、残念だが二人とも天下は取れぬバイ」と語った言葉が幼心にも強く印象に残っておりましたので、私は少々博識ぶって「話上手に天下は取れぬ」というと、その駕籠屋さんは満足そうに「本当だなあ、先が楽しみです」と、確か当時体重百キロもあった私に駕籠代をまけてくれたことがありました。

昭和四十年、当時熊本の県会議長であり自民党の県連幹事長であった私は、推されて参議院に議席を得ました。当時総理総裁を辞められたばかりの池田勇人前総理に公認と当選のお礼を報告にうかがった時、はじめて大平先生とお会いしました。池田先生を囲んで昼食をご馳走になり、その席上池田先生から「君はおれのところにこい。大平君が相談相手だ」とお誘いを受けました。派閥のことは何もわからぬ田舎者の私は、生意気にも「党は志を同じくする人の集合体であり、派閥はその政策を実行する集団でなくてはならないと思います。そのためには常に天下の宰相候補を持って行動することが大事だと思います。今、総理をおやめになった宏池会には総理候補が

おられますか？　単なる仲良しクラブなら私は遠慮させていただきます」と申し上げますと、池田先生も間髪を入れず「おれのところは大臣なら今日でも務まる人間ばかりだ、総理候補には事欠かぬ。前尾君、大平君、宮沢君。正に名士済々だ」。この様子を笑って聞いておられた大平先生から「日本繁栄の転換を図った大宰相からこいといわれたのですから……」といわれ、「ハイ」の一言で宏池会の一員に加えていただき、爾来公私にわたって大平先生にはわがままの言い通しでした。その私に「園田君、政治家は一年に一度で良い、人前でなるほどと皆が思うことを発言したら、後は黙して語らずだ、中央の政治家はそれでよい」。私はこのことを金言とし、また大平先生の教えとしてまいりました。

第二次大平内閣の国土庁長官として入閣した私に「田園都市構想、それは民族の伝統と歴史だ。君は三全総の具体化、すなわち田園都市構想の下絵を書け」といわれた時、事の重大さに身の引き締まる思いを禁じ得ませんでした。私は役所において、安定成長路線で経済政策を推し進め、倫理的家庭基盤を整備し、狭い国土ではあるが国民の住み良い日本を建設する、これが大平政治であり、国土庁の全機能を挙げ総理の指示と意図の実現に努めるよう協力を求めました。そうして描き始めた下絵がモデル定住圏という故郷づくりであった。

そこに突然の内閣不信任案可決、解散、そして衆参同時選挙。総理は最後の閣議後、私に「二人区だ、落ちるなよ。二人当選する努力をしろ、現職大臣は取り過ぎて敵をつくらぬことだ、熊本はむずかしいからなあ、まあしっかりやれ」といわれた。この言葉に戦いのなかにも「和」を尊ぶ大平哲学が私の胸を打ちました。

病床に臥された総理を何回か訪ねましたが、お目にかかれなく、急逝された後、森田秘書官から「何故会わせなかったのか、と強く怒られました」と聞かされた時、私は一種の強い感動を覚え、今も忘れることができない。

（参議院議員・第二次大平内閣国土庁長官）